光る砂漠●矢沢 宰 詩集

生命の詩

ほおずき書籍

もくじ

少年 7
早春 8
感謝 10
春の夜の窓は開けて 11
五月の詩 12
雨に思う 14
詩を書くから…… 15
俺は 16
さびしい道 18
五月が去るとて 20
それでも 22
五月最後の日 24
思い出の中の 26
鮒 28
空が 30
武器 32
詩の散歩 34
入道雲 35

走っても 36
夜の 37
二人で話したこと 38
すじ雲 40
おれの中に 41
ききょう 42
汽車 43
俺は 44
僕から 46
風が 48
足跡に滲む悲しい記憶 50
美しいもの 52
再会 54
一本のすじ雲 55
秋 56
本当に 57
そして終わりに 58
あなたの手は 62
さびしさのおとずれ 63
俺の中の貴方に 64
おしえて下さい 66

幸　68
まよい　70
あきらめ　71
決心　72
無題　74
自分だけに　75
昔　76
雪を見て　77
幻想　78
歩くこと　80
第一に死が　82
詩よお前は　84
空への告白　86
小道が見える　88
『生命の詩』発刊にあたって　89
矢沢宰　年譜　91

生命の詩

早春

雀の声の変わったような
青い空がかすむような
ああ土のにおいがかぎたい
その春にほおずりしたい
何を求めていいのやら
ああ土の上を転げまわりたい
きっとしまっているような
淡い眠りの中の夢のような
生きなければいけないけれど
何だか死んでもいいような
去年の春女がくれた山桜
まぶたの中に浮かぶような

雨に思う

いちごの花をぬらしたり
名も知らぬ草々ぬらしつつ
我が心もぬらしたもう
初夏の夕雨淋しかり

何の幸いあらねども
これまで生きるが幸いなり
細かい雨を見出しつつ
ただこれだけの思いなり

詩を書くから……

詩を書くから悩むのか
悩むから詩を書くのか
そうだ俺は悩むから
詩がうまれるのだ

鮒

われわれは
水分の少ない泥の中で動いている鮒だ！
頭を持ち上げたり身をよじったり
生きようと生きようとがんばる
鮒は世の中のものに追いつこうと必死である
動けば動くほど悪いとわかっていても……

それでも鮒には時々
澄んだ水が流れてくる時がある
すぐすぐ有頂天になってしまう
だがまたすぐしょげてしまう
それは泥の中しかわからないと思って……
鮒が見るのは空の色だけである
空に夢を託すこともある

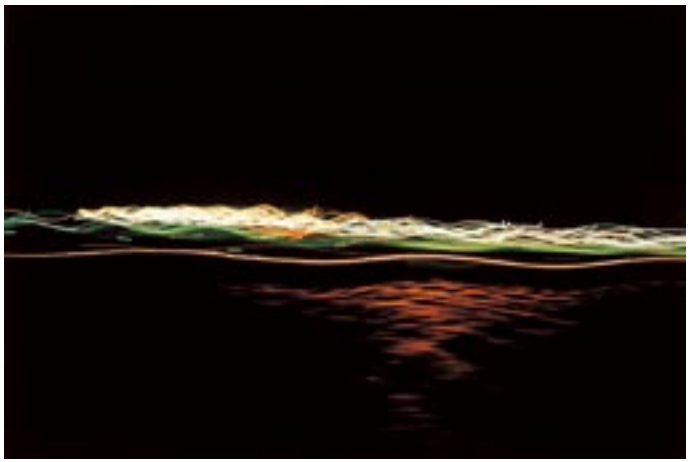
空が
空があんまり青いので
かた目をつむって
見たらば
母のような
やさしいものが
よこぎった
俺はうれしかった

走っても

走っても、走っても
空がどこまでもついてくるように
もがいても、もがいても
むなしさが続く。

夜の

よるのしずけさに
たえかねて
くびをまくらからあげ
ガラスごしに星空をみる
ポロポロとなみだを
ながすだけだった



俺は

俺は
なぜ心のなかで
ゴミすて場の
ようなところばかり
ほじくっているのだ！
もっと清い
人間になりたい

風が

あなたのふるさとの

風が

木蔭にこしかけて

あなたのくる日を待っている

おしえて下さい

神様 おしえて下さい

美しいのは 美しいと

見ていいでしょう？

好きなのは

好きだ！ といってもいいでしょう？

それがどんなになろうとも

あるものは あります

好きなんです
生きたいんです
悲しいんです
みんな みんなです
でもどうしようもないのは
どうしようもないのでしょうか？
神様 おしえて下さい

第一に死が

第一に、そこに死があり、死と戦わなければならなかった。そこには死と自分だけしかなかった。そこから個人的な真実、祈りが生まれ、それが詩となって表わされた。だからそれはリアルな、最もリアルなものである。

自分の命のために、愛を求め、生の真実を探るためにもがいていた。これは絶対に間違いではなかったし、今もこれが十分あてはまると確信している。